



最後のこせ瞽女

# 小林ハル

晩年の小林ハル

瞽女とは盲目の女性が三味線を伴奏楽器にして村々を唄い歩く旅芸人です。かつて越後平野に数百人もいた瞽女たちでしたが、戦後の混乱で姿を消していき、その最後の一人が胎内市（旧黒川村）で晩年生活した小林ハルでした。

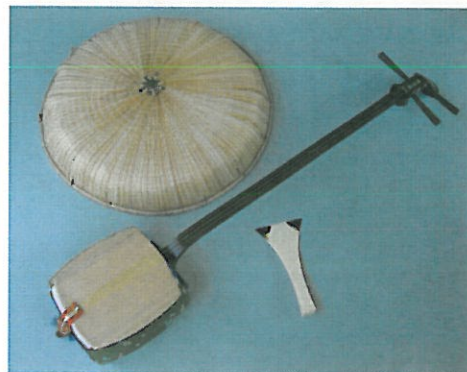
ハルは、明治33年（1900年）現在の三条市に生まれ、生後100日後に失明、5才のときに瞽女に弟子入りしました。8才から親方に連れられて瞽女の旅に出て、26才になって親方から独立して一人前の瞽女になりました。

73才になり新発田市の養護老人ホームに入所するまで、およそ70年間、三味線を持ち瞽女唄を歌い続け、その曲目は500曲を数えます。

昭和52年から平成17年まで、105才で永眠されるまでの29年間、「胎内やすらぎの家」（胎内市熱田坂）で後継者を育てながら生活し、その間、文化庁から国の無形文化財の選択などを受けました。



小林ハルの墓（胎内市熱田坂）



小林ハル愛用の三味線

平成17年（2005）年4月27日逝去され、五輪塔の墓が胎内やすらぎの家共同墓地（胎内市熱田坂）に建立されています。

おくり名：無量院春芳慈聲大姉（むりょういんしゅんぽうじしょうだいし）